
傍観者。ただそれだけ

響竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傍観者。ただそれだけ

【Nコード】

N1518R

【作者名】

響竜

【あらすじ】

とある転生者の何気ない旅の物語。

主人公は能力を持っていますが熱いバトルとか仲間との成長とかはありません。

そうゆうのが好きな人は期待しないでください。

旅の始まり（前書き）

なんとなく読んでくれれば嬉しいです。

旅の始まり

「さうてどうゆうことだこれ？」

俺は家で漫画やゲームを楽しくやっていたはずだが…

眠くなって目を閉じた瞬間なにやら会社の応接間みたいな所にいたのだ

おまけに誰も居ないし窓の外は真っ白で何もなく開かない。

「これがいわゆる、神に殺されて転生っていうテンプレか？」

「まあ、神みたいなものだね。」

その声に振り向くとソファーにスーツ姿の男がいた。

「誰あんた？」

「君が今言った自称神だよ？まあ無理によぶ必要はないけど。とりあえず座って。」

自称神の男に言わたので、怪しいがとりあえず座る事にした。

「一つ聞く。あんた俺を殺してここに連れてきたとかじゃないかな？お約束通り。」

もしそうだったらブン殴ってやろう。

「違うよ。君は死んだけどそれは突然の心臓マヒで運がなかったただけだね。あと、ここに来たのは偶然だよ。最近多いんだよね君みた

いな人。」

あくまで淡々と俺の状況を話すスーツ男。

「そうか…俺死んだのか。どうりで最近心臓あたりが痛むと思ってたんだよね。」

それを聞いてなんとも言えない気分になる

殺されていないのがわかったら死が随分あっさりしたものだというのを感じた。

「まあここに来たのも何かの縁。君にはさっき言ってた人達みたい何かしらの願いを叶えて望む世界に送ってあげるよ。たとえば…」

一つ前に来た男は

「まじで！？じゃあ銀髪のイケメンにして魔力もSSSランクにしてあと宝具とかもくれ！そしてリリカルなのはの世界に送ってくれ！俺がハッピーエンドにしてやるぜ！」

二つ前の男は

「身体能力と魔力最強でネギま！の世界に転生してください！ハレムつくってやるぜフヒヒ…」

「と、まあこんな感じで魔法やらファンタジーやらのある世界にいたがる人達が多いんだよ。君はどんな願いでどんな世界に行きたいんだい？ちなみに人気があるのはリリカルなのは、ネギま！、Faitという作品だけ。」

どれも二次創作で多いやつだな。けど…

「あいにくだが世界の救世主にも英雄にも興味はないんだよ。原作キャラに共感しないしな。」

そういうとスーツ男は意外そうな顔をした。

「おや、君みたいな考えの人間は初めてだよ。みんな魔法を使って誰かを助けようとするのに。」

「興味ない。それより俺の願いは…」

- ・ 身体能力の限界を無くす
- ・ 不老
- ・ ワンピースの三大将の能力（弱点なし）
- ・ 弾が切れないエボニー、アイボリー
- ・ なんでも入るトランク
- ・ 壊れない、燃料が切れない高性能バイク
- ・ 旅人の丈夫な服

「ふむ…常識離れしているけど他の人達よりはまだ無欲だね。ちなみに不死はいいのかい？」

「あんなもん気が狂うわ。これでまだ無欲かよ…。まあいいや、これで頼む。」

スーツ男はなにやらいままでの要求を紙に書いており見た目は街頭アンケートをしている人だった。

「では一番重要な事ですが…どんな世界に行きたいですか？」

これはすでに決まっている。

「俺が行きたいのは…キノの旅の世界だ。」

なぜならあの世界観がとても好きだからだ。どこか狂っている人や独特なルールを持った国。そして終わりの見えない世界どれもが心惹かれる。

「ほう…その世界に行きたいって人はいなかったよ。ははっ、君は変わってるね。じゃあそのドアをくぐってみなよ、それで終わしさ。元気でね。」

見るとさっきまで壁だった所にドアが出来ていた。やっぱり夢じゃないのかこれ？

ドアの前に立ちもう一度スーツ男を見る。
が、そこには誰もいなかった。

「…礼くらい言わせるよ、自称神さま。…ありがとうございます。」

怪しいスーツ男に感謝を言いながらドアを開ける。
ほんの一瞬眩しい光が覆う。

次に目を開けるとそこは木漏れ日が差し込む森の中だった。

「ついたのか？おっ。」

服装がダボダボの寝間着から旅人を思わせる灰色のコート、黒のロングTシャツ、薄い茶色のズボン、そして革のブーツになっており

腰のホルスターにはデビルメイクライのエボニー、アイボリーというハンドガンが差してあった。

「ほんとに神さまだったのか…じゃあバイクとトランクは…。」

「ちよつと、そこに突っ立てるお兄さんこつち。」

「ヒヤッハー！こつちだボーイ！」

「えっ？」

慌てて周りを見る。

すると少し離れた所にモンキーと言われる一般的な銀色のボディのバイクと座席に置かれているトランクがあった。

まさか…

近づいていくと疑問が確信になった。

「お兄さんが神さまの言っていた人だよね？よろしく。」

可愛らしい女の子の声が目の中のバイクから

「ンーなんだか締まらない顔してんなオメエー！」

柄の悪い男の声がトランクから放たれていた。

「…神さま面白いものプレゼントしてくれんじゃないか。」

これは予想外だった。いい意味で

「ね、アナタの名前は？」

「そうだなボーイ！教えるよー。」

「あ、ああ。俺の名前は*…」

そこで一旦口ごもる

前の世界の俺は死んだ。だったら名前も死んだんだ
ならば…

「…俺の名前はカラス…カラスだ。」

この世界での俺の名前を名乗ろう
カラスのように気楽な旅人になりたいから

「カラスだね、じゃあ私の名前は…あれ？そういえばなかったや。
そうだ！カラスが私の名前をつけて！」

「カラスか！なら俺にも名前をつけてくれよ！とびつきりクールで
ハードボイルドなやつをな！」

二人？がいつぺんに聞いてくるのでちょっとうるさい

「あ、じゃあバイクのほうはシルバ。トランクの方はパンドラでど
うだ？」

バイクはボディが銀色だから、トランクはDMCのパンドラのマー
クが書いてあるから

「シルバ…なんか響きがいいね。うん！今から私はシルバ。」

シルバの方は喜んでくれたみたいだ

「パンドラ？どうゆう意味だ？」

「災厄の箱って意味だよ。」

「災厄！？なかなかハードな名前だな！気に入ってゼカラス！」

こちら喜んでくれて何よりだ。

「じゃあカラス、よろしくね！」

「ヒヤッハー！せいぜい楽しませてくれよ！」

一人旅だと思っていたが思わぬ仲間がいたな。

「ああ、こちらこそよろしくな。シルバ、パンドラ。」

これはちよつと変わった一人とふたつの旅
何気ない話

旅の始まり（後書き）

更新は気まぐれです。

森の中で（前書き）

プロローグみたいなものです。

読んでくれる人ありがとうございます。

森の中で

ダンダンダンッ！

木の葉っぱが空を覆いところどころから木漏れ日が差し込む森の中
一本の木の枝に的に見立てた石を吊るしてそれを撃っている一人の
青年がいた

悪くない顔つきだがどこかやる気のない表情で黒の長いＴシャツを
肘まで捲り片腕で側面にピアノの鍵盤のような模様がある、白いス
ライド式のハンドガンに似た銃を何度も撃っている
だがさつきから何十発も撃っているが弾が切れる様子がみあたらない。

ダンッ！

とどめとばかりに石の真ん中に一発当てて砕くと撃つのをやめる。

「あゝ腕が痺れる。いきなり慣れない銃撃つまんじやないな。…それにしても重いエボニー。」

愚痴をこぼしながら青年は腰のホルスターにエボニーと呼ぶ銃をし
まう。その腰にはもう一つ対称的な黒色をした銃アイボニーが差し
てあった。

「とりあえず弾が切れないってのはわかった。さて次は…」

いきなり青年の体は黄色の光が覆い次の瞬間には10m程先に移動
していた。

そしてそれを確認した後右腕が赤黒いドロドロした液体に覆われ、
その液体が地面に落ちるたびに生えている草が焼かれている所を見

ると高温のマグマだという事がわかる。

その次は左腕が氷に覆われる。その左腕で近くにあった葉を掴む
すると葉は左腕と同じように氷漬けになり少し握ると粉々に砕けた。

両手をそのままにし森とは逆の方向の平野にある大きな岩に片足を
上げて足の裏を向ける。

「加減しないとな…」

足の裏が一瞬光つたと同時に一筋の光線が岩に向かい

カツ、ドオオオオン！

爆発が起き、岩は跡形もなくなって代わりに直径4mくらいのクレ
ーターが出来ていた。

「オゝ恐いねエゝ。こりゃ極力、銃しか使わないようにしないと…。」

「

さすがにこの能力は強すぎるか？
自分の願いで自分が悩んでいると

「ヒュー！なかなかクレイジーなモン持ってんじゃねえかカラス！」

「カラスゝそろそろ行こうよゝもう飽きた。」

傍に停めてあつたモトラド（この場合は二輪車を指す）から気だ
るげな女の子の声

それに立て掛けてるドクロの模様があるトランクからは柄の悪い男
の声が発せられる。

この世界に来てから一日

カラスはまず自分の能力の確認をした。身体能力は変わってなかつ

たが2丁拳銃の弾が無限な事と体を光、マグマ、氷に変えられるのがわかった。

ちなみに食料は近くの川の魚を捕まえて食べていた。

「ん、そろそろ行くか。待たせたなシルバ、パンドラ。」

モトラドに近づき掛けてあつた灰色のコートを羽織ってバイクにまたがる。と、そこであることに気付く

「そついやゴーグルがないな。あれがなきゃ目が開けられないんだけど…。パンドラ、入ってない？」

「開けてみな。いろいろと神が特典をつけてくれたぜ。」

パンドラと呼ぶトランクを開けてみるとそこには衣服やナイフ、腕時計や元の世界の携帯食料など旅には必要な物が明らかにトランクの容量を超えて入っていた。

「なんでも他の奴より圧倒的に欲が少なかった分も込めてらしいぜ。」

「ほゝ、あのスーツ男なかなか気前がいいね。おつ、ゴーグルあった。」

ゴーグルを掛けてバイクのエンジンをかける。

「やっとあたしの出番だね！このシルバ、ただのモトラドと思ってもらっては困る！フルスロットだー！」

「お前テンションの落差激しいな。」

「なんでもいいけど落とすなよ」カラス。
なにやら騒がしいシルバと呼ぶモトラドに乗って森を出たすぐの道
を走って行った。

森の中で（後書き）

次から国に行きます。

花の話（前書き）

なにか一言いただければ嬉しいです。

花の話

やわらかい日差しが照らす白い花が辺り一面に咲く花畑

その花畑に出来た一本道を走る一台のモトラド（この場合は二輪車を指す）と一人がいました。

「わあゝ綺麗だねカラス。」

モトラドが可愛い女の子の声で言う。

「ああ、旅をはじめたばかりでこんな風景見れるなんて思ってたかった。」

同じように感想を言うカラスと呼ばれた運転手は、十代後半程の青年で灰色のコートと下にある黒い長シャツごと肘まで捲り腰には白と黒の対称的なふたつの拳銃を差し薄い茶色のズボンを履いた格好をしていた。

「確かにキレイだがよゝつまんねゝぜ。」

モトラドの後ろに、落ちないように縄で固定されたトランクは柄の悪い男の声でそんなことを呟く。

「おいおい、つまんないなんて言うなよパンドラ。まあ俺もそんなキラじゃないけどさ……。」

「ふう、まったくふたり共自然を愛でる心が足りないね。そんなじゃわたしみたいなキレイな心を持ってないよゝ？」

「カラス。なんか家が見えてきたぜ。」

「おっ、ほんとだ。人がいればいいな。」

「無視！？酷い！シルバの心は傷ついたよ！」

シルバの叫びを無視しつつカラス達は花畑の中に建ててある一つの小さな家の前まで来ました。

「すみません、誰かいますか。」

カラスが呼ぶとしばらくしてドアが開き茶色の長い髪をした若い女の人が出て来た。

「はい。あら！もしかして旅人さん？」

「はい。ちょっと尋ねたいことがありますて…こいつもいいですか？」

「ども〜シルバっていいます。」

「パンドラだ。茶髪のねーちゃん。」

「もちろんよ〜！ささっ、上がって！」

茶髪の女性に言われるまま家に入る。

中は一人で住むにはちょうどいいくらいの広さで、台所と椅子と机以外は特に何もない簡素な内装だった。

「今お茶煎れるからその椅子に座っていてね。」

茶髪の女性が台所に向かった後カラスは椅子に腰掛けシルバを横に停める。パンドラはそのままくりつけたままだ。

「お待ちせ旅人さん。紅茶なんだけどお口に合うかしら？」

しばらくしてポットとカップを持ってきて二人分を注ぐ。先に茶髪の女性が飲むのを見てからカラスも一口飲む。

「おいしいですね。あつ、言い忘れてました。俺の名前はカラスって言います。」

「カラスさんね。それでカラスさん達は何が聞きたいのかしら？」

「はい。この花畑ってお姉さんが育てているの？」

間髪入れずにシルバが聞く。

「ええそうよ。この花畑はすべてわたしが毎日管理して種から育てているのよ。」

その質問に茶髪の女性は嬉しそうに答える。

「なんでこんなに広い花畑を育ててるんだ？茶髪のねーちゃんよ。」

続けてパンドラが聞く。

「そうねー広いのはわからないけど、この花畑は元々父が管理していたのよ。けど病気で死んでしまったから父の形見でもあるし私自身も花が好きだから育てているの。まあ、もう一つ訳はあるんだけどね。」

そこまで言い終わると茶髪の女性は紅茶に口をつけて一服する。

「なるほど…わかりました。あの、良ければもう一つの訳を教えてくださいませんか？」

「わたしも気になる…。お姉さん教えて！」

「いいけどあまりびっくりするような事ではないわよ？」

茶髪の女性はカップを置くと少しもったぶるように言う。

「あの花はね、薬になるらしいのよ。」

「薬…ですか？なんの？」

「そう。詳しくは知らないけどたまにどこかの国から人が来て花をたくさん欲しがるの。理由を聞いたらこの花から作れる薬はみんなを幸せにするからだって言うから私は喜んで提供したわ。もちろんただって訳にはいかないから最低限の食料や日用品と引き替えにつて約束をしたけどね。」

「へえ…みんなを幸せにする薬ね…。すごいや…。」

「良かったですね。自分の育てた花で人を幸せにするなんてすごいですよ。」

「ああ、まったくだぜ…。」

「ふふっ、ありがとうね。」

カラス達の言葉にやわらかい笑みを浮かべる茶髪の女性。

「じゃあ私からもカラスさんに質問してもいいかしら？」

「いいですよ。俺に答えれる事なら。」

「難しい事じゃないわよ。え〜っと、カラスさんはなんで旅をしているの？」

その質問にカラスは少し間を空けて考えるような仕草をした後口を開いた。

「そうですね…変な答えになるんですけど…旅を止めたくないからですね。」

* * *

「話ありがとうございます。紅茶とスープ、おいしかったです。」

カラス達は少し世間話と近くの国の場所を聞いた後、お昼というところで野菜スープとパンをご馳走になった。その時食事が出来ないシルバとパンドラはつまらなさそうに愚痴を垂れていたが。

「どういたしまして。私も久しぶりに旅人さんと話せて楽しかったわ。」

「わたしも楽しかったよ。花畑の管理がんばってね。」

「じゃあなねーちゃん！花もあんたも綺麗だぜ。」

「ふふっ、ありがとうねパンドラさん。それじゃあみなさんもお気をつけてね。」

「はい。それでは…。」

シルバのエンジンをかけて花畑の道を進む。ちらつと後ろを見ると茶髪の女性は笑顔のまま手を振っていて真っ白の花畑によく映えていた。

「いい人だったな。」

「それに美人だしね。カラスもしかして惚れちゃったんじゃないの？」

「そりゃー無理だな！テメーは二枚目と三枚目くらいの顔だからな！ウヒヤヒヤ！」

「勝手に話を進めんな！…まあ、美人だったけどね。」

花畑を抜けてしばらく平野を走っていると

「ん？カラス、向こうからなんか来るよ。」

道の反対側から大きいトラックが走って来た。

向こうもこちらに気付いたらしくスピードを落としながら近づいてきて窓から体格のいい男が顔を乗り出した。

「よう、旅人さん！あんたもしかしてこの先の花畑を通って来たのかい？」

「ええそうです。もしかしてあの花を積みによ？」

「おつ、知ってたのか！てことはもしかして俺の国に行くつもりかい？」

「はい。あのーあの花からみんなが幸せになる薬が作られるって聞いたんですがどうゆうことなんでしょうか？」

それを聞いた瞬間男の顔から笑顔が消えて真剣な顔になった。

「旅人さん。俺らの国へ行っても話さないっていうなら話してもいいぜ。」

「…わかりました。こう見えて口は固いですから安心してください。」

「そうか…あの花から作れるやつにはな、強力な快楽と依存性がある毒があるんだ。」

「毒…ですか。」

「ああ、それを俺の国の裏では欲しがる奴に高く売りつける商人がいるんだ。一回目は安く、次から段々と値段を上げてな。ただやっていく内に廃人になるか気が狂って自殺するかしか見たことないが。」

「…その国には取り締まる人がいないんですか？明らかに違法なのに。」

「それがな…それが国の収益の一部にもなっているから上の人間が

力で押さえつけているんだ。まあ俺もいい金になるからあまり悪く
わ言えないけどな。」

男は最後の言葉をばつがわるそうに言った。

「使った人は快楽を感じる、売った人は金になるからみんな幸せに
なる薬って呼ばれているんだね。」

「まあな、ただ幸せなのはどっちも一時的だけだ。いずれどちらも
ツケが回ってきて破滅する。だから俺は使わないんだ。」

「…話ありがとうございます。お仕事頑張ってください。」

「おう、旅人さんも危ない事にはなるべく首突っ込まないようにな。
俺の国はこの先の分かれ道を左だよ。」

男はそう言うのと再び重いエンジン音を鳴らして反対側に走って行っ
た。

「あのねーちゃんこの話聞いたらどんな気分になるだろうねえ。」
「うーん。なんかやりきれない気分になっちゃったね。」

「さあ…な。とりあえず」

カラスもシルバのエンジンをふかせる。

「次は右に曲がるか。」

「…ヘタレ。」

「まっ
たくだ
ぜ。」

花の話（後書き）

原作の雰囲気が～
…

祈る国（前書き）

短いです。

祈る国

あるところにボロボロの建物が立ち並ぶ、国だった場所がありました。

その中央には元々は立派なお城だったであろう建物がありました。壁や屋根が崩れている中でなぜかキレイな女の人が描かれているステンドグラスだけがそこに残っていました。

「わあっ、まさに芸術だね。シルバの芸術魂が疼くよ！」

「嘘つけ。けど確かに芸術品だなこりゃあ。なかなか見れないぞこんなもん。」

その前にトランクを載せたモトラド（二輪車を指す）と旅人が停まってまっていた。

「けどなんでこれだけ残っているんだろうな？戦争があつたらしいのに。」

「途中で会ったお爺さんが言ってたけど、この国の人はこのステンドグラスの女性に祈りを捧げていたらしからね。もしかしたら神のご加護があるのかもね。」

「ヒヤハハ！だったらなんでこの国の神を信じた奴等は誰も居ねえんだ？」

「さあ…国を捨てたかみんな死んでしまったからかな。ま、どっちにしても」

カラスは辺りを見渡します。

そこには無数の人間の白骨が十字の磔に掲げられておりとても不気味です。

そのどれもがコートや銃を着ており旅人だとゆうことがわかります。

「国が残ってる時に来なくて良かった。神の生け贄にはなりたくないからな。」

しばらくして旅人はシルバに乗って居なくなっていました。

ステンドグラスのキレイな女性は、今日も微笑んで国だった場所を見守っています。

人殺しの話（前書き）

お気に入りに入れてくれた人ありがとうございます。

人殺しの話

あるところにとても人を殺すのが好きな男がいました。

男は人を確実に殺す為にパースエイダー（銃器）や体術、ナイフを使った暗殺術などあらゆる技術を極めました。

そして毎日二つの山に挟まれた谷を通る人を待ちます。

ある日、馬車に乗ってたくさんの商品を持って護衛をつけた中年の男性が谷を通りました。

護衛はパースエイダーを持っていたので男もパースエイダーを素早く出して撃ち殺してしました。

残った中年の男性もパースエイダーを撃とうとしましたがそれより早く撃たれてしまいました。

男は馬車の商品だけとって残りは燃やしてしまいました。

ある日、大きな荷物を背負った一人の若い男性が歩いて谷に来ました。

若い男性はナイフを腰に差していたので男もナイフを持って近づきました。

若い男性は驚きながらもナイフを持って構えましたが素早く懐に入られて喉を切られました。

男は荷物から金目の物だけとって残りは川に流してしまいました。

ある日、灰色のコートを着た青年がモトラド（二輪車を指す）に乗って谷に来ました。

青年はモトラドを停めて昼食の準備をしています。

男は青年の武器がなかったのを見て体術で殺そうと後ろから気配を消して近づきます。

そして男の腕が青年の首に触れた瞬間

男は一瞬で凍りついてしまいました。

青年は凍りついた男を一瞥すると軽く叩いて砕いてしまいました。

青年は砕けた男を集めると穴を掘って埋めた後、男の持っていたパースエイダーとナイフを地面に刺して簡単な墓を作りました。

そして一礼するとモトラドに乗ってどこかへ行ってしまうました。

ある日、今にも壊れそうな黄色の車に乗った少し背の低いハンサムな男性と長い黒髪の女性が谷に来ました。

二人はしばらく進むとナイフとパースエイダーが刺さった簡単な墓を見つけました。

女性は近くで車を停めて墓の前に来てしゃがみこみました。

しばらくすると再び車に乗りこみ男性に言って車を発進させてどこかへ行ってしまうました。

後に残った墓にはナイフと、弾とサイレンサーが抜き取られたパースエイダーが残っていました。

人殺しの話（後書き）

更新が不定期過ぎるのはご了承ください。

流行の国（前書き）

もしかしたら似たようなものがあるかもしれません。

流行の国

あるところにカラスとパンドラとシルバがいました。

一向はある日、城壁に囲まれた国を訪れました。

カラスは門番さんにこの国の特徴を聞きました。

すると門番さんは「入ればすぐにわかりますよ」と言いました。

国に入るとカラス達はすぐに住民の人達に囲まれて歓迎されました。そして住民の人達はカラスの服装やシルバの形、パンドラの大きさなどを細かく聞いてきました。

カラス達は安くていいホテルで過ごしました。

次の日、カラスが町に出ると自分と同じ灰色のコートを着た人達で溢れていました。

町の人達に聞くと今一番の流行らしく、服の店ではコートを奪い合っていました。

その日はちょっと汚れて不機嫌なシルバを洗って過ごしました。

次の日、町に出ると灰色のコートの人は居なく、代わりに腰に2丁のパースエイダー（銃器）を差した人達で溢れていました。

町の人達に聞くと灰色のコートはもう古いらしく、今はパースエィダーを2丁持つのが流行だ、と言いました。今日はパースエィダーの店で奪い合いがありました。

その日は買った生の食料などを嫌がるパンドラに詰めたりして過ごしました。

次の日、カラス達は早起きしてさつさと国の門をくぐりました。

「やあ旅人さん、どうでした？」

「そうですね、慌ただしい国でした」

「ハハッ、そうですね。いつものことです」

「今日は何が流行りでしょうかね？」

「旅人さんは分かったから出てきたんじゃないかい？」

「ええ。多分、喋るトランクか喋るモトラドを欲しがる人がいるんじゃないんでしょうか？」

「でしょうね。なら旅人さんは流行の最先端ですね」

「…どうも」

流行の国（後書き）

この話は流行に疎い作者のひねくれた考えが生み出した話です。

ある夜の話（前書き）

自分の信念とか正義を押し付けてくるキャラって嫌い

ある夜の話

パチパチ……

夕暮れの光が周りの風景をオレンジ色に染め、気温が下がりだした時間帯。

広い平原で焚火をしている灰色のコートを着た青年の姿と、近くに停めているモトラド（二輪車。空を飛ばないものだけを指す）があった。

「なあシルバ、パンドラ」

「ん？なにカラス？」

「ああん？なんだ？」

焚火を眺めながらカラスはシルバと呼んだモトラドと、その座席に乘せているパンドラと呼ぶトランクに呼びかける。

「いきなりだけど…正義ってのはなんなんだろう？」

「そりゃ、勝ったやつが正義だな！戦争だつてそうだろう！」

「んゝ、私は…人助けとかすることじゃないのかな？」

「……そゝかい」

その質問になんともアバウトな返事を返すふたりにカラスは苦笑をしながら自分も答える。

「俺はさ…正義なんて無いんだと思うんだ。状況や人でいくらでも変わるんだしな。でもあえて言うなら……自分が決めればそれが正義なんじゃないかねえ」

「ふーん。じゃあさ……この人達は正義だったのかな？」

そう言うシルバ達の周りには、迷彩色の軍服を着た男達の遺体があちこちに転がっていた。

その大半は頭や心臓などの急所に銃弾を食らっており、更に男達が乗っていた頑丈そうなタンクは、巨大な力を食らったように砲台ごと上の部分がひしゃげて地面に陥没していた。

「さあな、それにしてもいきなりだったなあ！半分イカれた目で、
「我らの正義の為に犠牲になってくれ」、なんて言いながらカラスの晩飯と荷物取ろうとしてきたんだからな！」

「多分どつかの敗戦国の軍だろうね。国が滅ぼされて行く当てが無くなったって所かな？でも相手が悪かったよね」

「流石に訓練された軍でも、弾が効かない上に光の速度で蹴ってくる相手にはどうしようもないからね……」

カラスはなんともいえないような表情をしながら、小さくなった焚火に枯れ枝をくべる。

しばらく間を開けた後今度はシルバがカラスに聞いてきた。

「ねえカラス、自分は正義だと思う？」

「……どっちなんだろうな。死にたくはなかったがな……」

「じゃあ教えてあげるよ。カラスはね……」

シルバはそこで一旦言葉を勿体ぶると

「正義なんかじゃないよ。絶対にね」

「まあ、間違ってもないだろうがな。ウヒヤヒヤ！」

「……かもな」

ふたりの言葉を聞いて少し微笑むカラス。

しばらく焚火のパチパチという音だけが平原に響いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1518r/>

傍観者。ただそれだけ

2011年10月2日12時57分発行